「真冬のさよなら」

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「真冬のさよなら」

【Ｎコード】
Ｎ０９４０ＢＡ

【作者名】
三毛猫

【あらすじ】
――「これで最後……なのね」クラスメイトの少年を前に、わたしはどうしてもあきらめることが出来なかった。
【これで最後】【商店街】【手袋】のお題で書かれた掌編です。
以前ｔｅｘｐｏにて公開していました。現在ｐｉｘｉｖにても「三毛猫の三題話」の一遍として公開中です。

「これで最後……なのね」
わたしは毛糸の手袋で包まれた両手にハァとあたたかい息をふきかけながら、寂れた商店街の片隅に佇んでいた。目の前には不機嫌そうに眉をしかめるクラスメイトの男の子。
「ねぇ、全部なかったことにして、もう一度、初めからやり直すことはできないのかな……？」
上目遣いに、彼をみつめる。どうしても、わたしにはあきらめることが出来なかったから。
「そんなこと、出来るわけがないだろう？」
彼は無情に首を横に振った。
「だって、いくらなんでも、ひどすぎると思う」
……三十回もしたのに。なのに、そんなに冷たい顔で終わりを告げるなんて。彼には情という物がないのだろうか。わたしが、これほど想っているのに。恋焦がれているのに。
「……いつまでそこでそうしているつもりなんだ？」
「ねぇ、お願い！　もう少しだけ、待って」
わたしは小さく深呼吸して気持ちを落ち着けようとした。
「……じゃあ、いくね」
神様、お願い。奇跡を起こして！　このままさよならだなんて、そんなの絶対にイヤなの！
カラン、と軽い音を立てて転がった玉の色は白。
「ほら、残念賞のティッシュ。終わったならそこ退けよ。待ってる人いるんだから」
商店街のハッピを着た彼は無情に終わりを告げて、わたしを台の前から押しのけた。
わたしは渡された三十一個目のポケットティッシュを胸に抱えて途方にくれた。

……二等賞のクマのぬいぐるみ、すっごく欲しかったのに。ぐすん。

（後書き）

初回でニヤリとできた方は、できればオチを踏まえた上でもう一度最初から読んで主人公の言動を笑ってやってください。かなり無茶苦茶言ってますこの子。

ちなみにこのあと主人公は、商店街のおもちゃ屋で泣き落としして値切ったクマたんを無事にげっとしたようです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0940ba/

「真冬のさよなら」

2012年1月2日02時51分発行